

山国隊軍樂の謎と

維新勤王隊軍樂に連なる音楽

手鼓貝傳



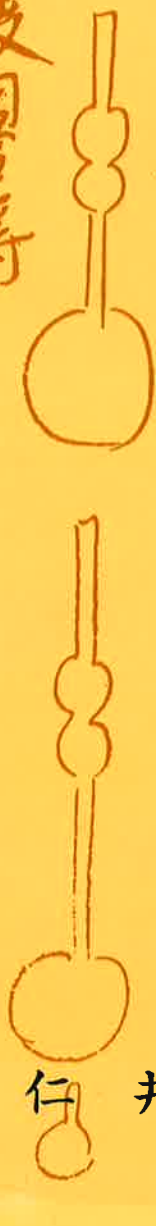
笛貝傳



安堵貝傳



變貝傳



要緊貝傳



引貝傳



仁井田邦夫

目次

山国隊軍楽の謎と

維新勤王隊軍楽に連なる音楽

山国隊軍楽の謎	3
山国村の紹介	4
山国隊	6
山国隊軍楽の成り立ち	10
椿寺	11
時代祭	12
平安講社設立「趣意書」	13
平安講社規約	15
朱雀学区	16
壬生	16
西ノ京	17
朱雀門址	18
何故軍楽隊は山国から朱雀学区へ	20
奥村静女氏の手紙と訳	21
横山孝之衛先生の太鼓奏法の教え	25
鼓法横山孝之衛先生の事	27
訳	27
権變録「乾」	38~28
訳	39
戊辰行進曲・曲について	41
小太鼓一楽譜一現代楽譜	51
朱雀行進曲一楽譜一現代楽譜	53
北桑田郡著名人物	54
藤野斎隊長	54
藤野斎と牧野やな	54
立命館禁衛隊	55
著書、資料提供者、協力者の紹介	56
編集後記	56

京都府大学吹奏楽連盟理事長
花園高等学校吹奏楽部顧問
エスポワール吹奏楽団常任指揮者
仁井田邦夫

山国隊軍楽の謎



前書き

何故私がこの様な記録をまとめる気になったか、その動機については色々ありますが、いわば山国隊軍楽に連なる音楽。現在時代祭の先頭を歩く維新勤王隊軍楽について、私が特に興味を持った動機は、ある先生に見せていただいた「権變録」乾・嘉永6年8月写之(1853)(ペリーが艦隊を率い浦賀に入港した年である。)でした。この書は伏見のある旅館の蔵を壊した時に出て来た物で、安く買われたそうです。そして後日又、その先生に見せていただいた巻物「鼓法入門誓詞」(1844)が、増々私の気を高ぶらせました。

初めから私は、「鳥羽伏見の戦い」(明治元年1868)に関係した音楽で、何かの経過を辿り今日に伝えられたものと考えておりました。しかし、軍楽隊の編成や曲を研究して見ますと、1868年以前からの音楽である事がわかって来たのです。1984年10月、京都府吹奏楽連盟創立30周年記念誌を編集している時、出来るだけ古いルーツを探って見たくなり、調べている内に色々な事を発見し何か冷凍庫の氷が徐々に溶けるかの様に分って来ました。

その内容について興味を抱く方々へ少しでも役立てば幸いであると考え、椿寺で山国隊は何を学んだのか等、まだまだ謎を残し未完成ではありますが編集してみました。

京都府大学吹奏楽連盟理事長

花園高等学校吹奏楽部顧問

仁井田 邦 夫

■文章や漢字は現代風に読みやすくしました。

山国村の紹介 (現・北桑田郡京北町)

本村は郡内最古の郷庄の一にして、既に延喜武神名帳(901年)に山国社の名を載せ、倭名抄に山国郷の記事あるより見れば、平安朝の中期には田畑を開き山樹林材用いられて、戸数や人口も頗る多かった。今本村に保存している「古家撰傳集」(1763年)河原林氏蔵「丹波藤原身人部水口家系図写本」及び「丹波北桑田郡山国庄往右緒書」等によれば、いづれも『桓武天皇の御宇山城国長岡へ御遷都御造営につき、丹波国北山中御山国庄を御廬御料地と定められ、平安京奠都に際しても良材を捧げ造営の工を成し遂げ、この地守護職としては重成官人を派遣し、その後宮室の御造立毎に仕官の者召加へられ。相応の私領を拝受し叢雲大寮在勤を兼ねた。その子孫連綿として山国庄に居住す云々』と見ゆ。即ち本村は桓武天皇の延暦年中(784年)より皇室御用材の進納を奉じ、やがて宮中御料地となりてより、多少の変遷あるも、相續いて江戸幕末に及びしなり。されば本村には正治2年(1200年)に至ったといふ「三十六名八十八家私領田畑配分並官位次第」の写本を存し、此れによれば比果、窪田、鳥居、水口の四家が最も古く、ついで河原林、藤野の両家等出頭し、一族繁栄して現代に及びしを知る。

殊に「古家撰傳集」の如き漸次改作修訂せられて、今や数種の同書を伝える如き、最も世の信用を失うものである。とはいえ本村が

平安期の初頃より良材を皇室に納め、歴代の^{なめ}大嘗祭に際してはその悠紀主基兩殿の造営に用いられる木材を上納し、時には主基齋田を命ぜられて新穀を上り、大堰川に産する年魚を毎年宮中に献じ^{たて}事實は毫も疑うことなく、明確なる証拠たり。しかも皇室式微の^{はて}極と伝うる戦国の世にありても、この村が絶ず献身的な誠意を持続せしことは、我が国勤王史の上にも特筆すべき価値があると信ず。但しここにいう山国村は、旧黒田村及愛宕郡花背村の一部をも包含するものと解釈すべし。市原文書に曰く。

これ等の古記録いづれも原本にあらずして、遙かに後世なる江戸時代の筆写によることは、本村の由緒と各家門の沿革とを調べるに十分な証拠となる書物ではない。学者達が多少の疑問を持つことは甚だ遺憾であるといわざるをえない。

足利義昭が京都を逃げ回って近江国に至り、更に丹波国山国弓削津野々村の郷士の守護を得て若狭に行った記事にして、本村はすでに皇室御料地として、永く忠節を朝廷に働くのみならず、一方には足利將軍を助ける事にも加担して幕府に恩を報いる力もあつた事が知れている。かくて本村には皇室関係の記録文書が多く保存され、国史の書籍にも史料にも本村の名数々記録され、現に府社山国神社があり、法皇御開基の大雄山常照皇寺があり、

近く維新に際しては勤王隊を組織して、奥羽地方にまで忠戦の軍功を樹立し、由緒正しき家門を鮮かにして、自ら他の諸村に比し悠然として頭角を描いていた。江戸時代に及び1616年山口駿河守杉田九郎兵衛、村上三右衛門、同藤三郎各代官たり。1672年北賀江村の内300石を梶井宮御領地とす。1698年旗本杉浦内蔵允の御領地とされ、その他は宮中御料地として明治初年に至る。明治12年より同19年まで郡役所所在地となっていたが、今は周山に移され、10文字より成る自治村となる。

本村は都の南部に位置し、東は黒田村及び愛宕郡鞍馬村に接し、南は細野村及び葛野郡小野郷村に接し西は周山弓削両村に連なり、北は弓削村と境としている。大堰川に沿った一帯の地を除いてはほとんどが山地で、連なる山を周り、交通の便は全く悪く、大堰川は黒田村より流れて本村を通り周山村に流れている。水の勢いは急速で河底は浅いので筏を流し外便はなかった。支流に祖父谷川塩川などあり、小塩部落は本村の最高地になり、河川は著しく上流性を帯び、大瀑、布瀑の大きな滝があり。今本村は分けて、下・鳥居・辻・塔・中江・比賀江・大野・井戸・小塩・初川の十文字とす。

郷庄 いくつかの村を集めた国を意味する。

倭名抄 中国で日本の事をぬき書きした書。

御宇(=御代) ある天子の治める時代。

山 材木をきりだす山、切り出した材木。

奠都 みやこを定める。

叢雲 群がり集まる雲。

連綿 長くつづいてたえないさま。



山 国 隊

(通称 やまぐにたい、又は、さんごくたい)

明治維新の大きな業はもとより明治聖帝の御稜威と輔弼翼賛の任に膺りし功臣の畫策宣しきを得たるとに職由せるはいうまでもなし。然れども我が山国隊の如き亦勤王史の一員を占むる価なしとすべからず。故に今その梗概を記述して芳を後に伝えんとす。委しくは明治39年1月山国村の人永井登代の編集している「山国隊誌」に載せられたれば、就きて看るべし。慶応3年10月14日徳川慶喜大政奉還の事を奏請し、ついで征夷大將軍の職を辞せんと願い、いづれも勅許あり。ついで12月9日小御所合議行われ王政復古の重大令が発せ



山 国 神 社

られ、總裁議定參與の三職は、それぞれ任命せられたるも、慶喜更に興からず。そしてその27日辞官納地（慶喜の内大臣を辞し幕府の領土をことごとく朝廷に返納すること）の勅命さえ下りたれば、徳川譜代の諸侯及び新藩中には慶喜の同情するの余り、朝議の厳正を喜ばず。まさに幕府を助けて為す所あらんとし、物情騒然たるものありき。慶喜事端を京都に発せんと心配し急に二條城を出でて大阪城に退きたるも、諸臣の薩長専横を訴ふるに及び、終に黙止する事出来ず、表を捧げ兵を帥めて京に迫るに至り。ここに明治元年戊辰の役は正月早々伏見鳥羽の地に起りぬ。中納言西園寺公望は山陰道鎮撫使を命ぜられ、激を飛ばして勤王の士を募る。正月5日檄文山国郷に達すその文に曰く（略）。

古来王臣を以て自ら負へる我が山国郷士いかでかちゅうちょすべき。忽ち決起団結して之に応ぜんと計り、従5位下近江守藤野齋、備前守水口市之進、河内守鳥居専学、大和守河原林安左衛門の四沙汰人を首領とし、同志83人を録して二軍に分ち、第一軍63名は齋、市之進の2人之を率る。第二軍20名は専学、安左衛門の2人之を率いて、ここに山国隊の組織成る。同11月両軍共に山国神社前に列して武運長久を祈り次の誓約書をさぐ。

一、今般名主一同勤王を唱へ有志の銘々団結出兵致すべき仲間は相互に私論を省

き万事公道に従べき事。

一、出張中は四沙汰人伍長の指揮に相背き不平不満をいわず忠勤を尽くす事。

一、往復道路筋に於いて乱暴やみだりな行動一切禁制たるべし諸事相慎む事。

一、同志之者私論申立口論一切を禁ずる。

最も酒は禁酒同様たるべき事。

上上堅く相守るべし、もし違反有る者は、社司仲間相省き即日除名申付者也。

慶応4年1月11日

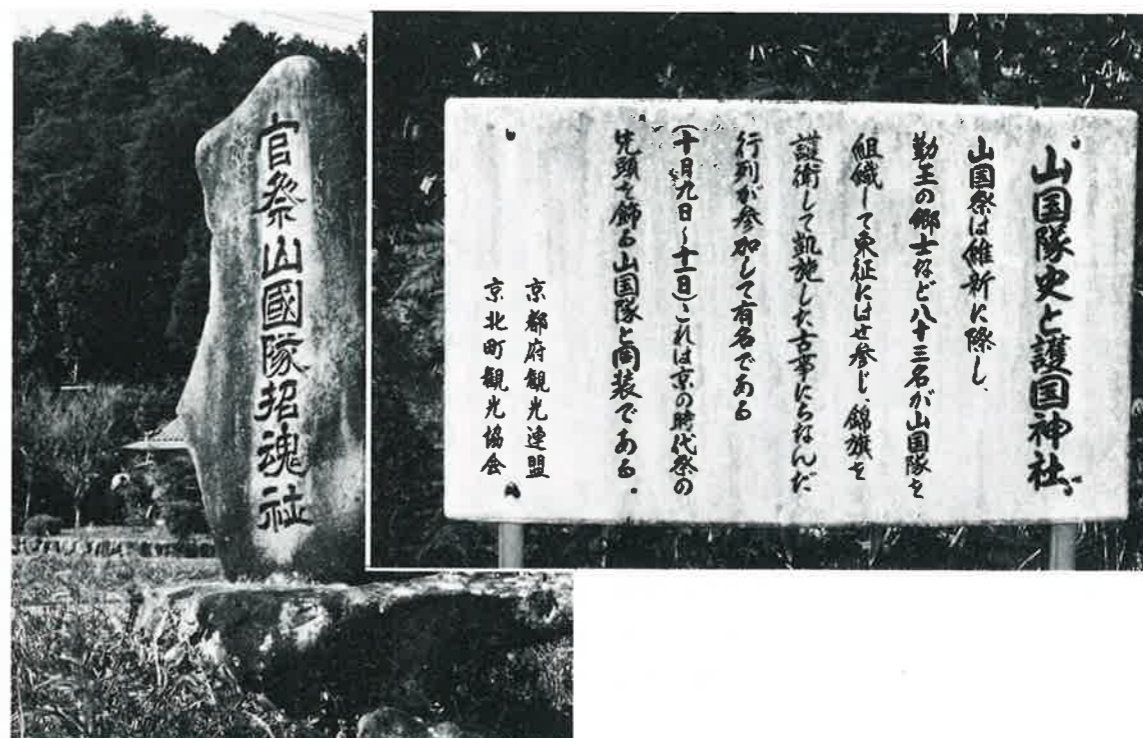
山国社司総代理

四沙汰人中

組頭中

隊士決別の酒を酌み威風堂々として出発す。第一軍は船井郡園部を経て檜山に至り、こゝに舎営して命を待ちしに、16日因幡藩士伊王野治郎左衛門来り、鎮撫使の命を伝えていふ。当隊既に具に満ち更に多きを要せず且沿道刀により血を流さずして平定せしが故に、今は

汝等を加ふるを望まず。速に帰郷して再命の機を待つべしと、齋等聞きて遺憾にたへず直に京に上り參與岩倉具視に面し、事由を陳じて奉公を請ふ。この間第二軍も亦大阪に至しに、総督小松宮嘉彰親王より賊徒販走して江戸に向ひ別に汝等を要せず速に郷に帰りて後命を待つべしとありしかば、20日京都に於て両軍相合し素志を貫かんことを議して、東西に奔走せり、2月10日に至り參與役所より次の命令は下れり。曰く、来13日御征東先鋒総督宮出陣には其方共一小隊の人数を編制し、同日午前6時因幡の手に加はり出兵可能に致り最も万端同藩へ照合し条件を聞く事。83名はいずれも決死の勇士なれば、皆従はんことを願うて止まずされど許されざりしを以て漸く35名を選抜して之を一隊とし、藤野齋が組頭となりて東征の軍に加はれり。（以下省略）「山国の方に聞けば、27名出兵したと聞くと云うし、他の書で人数をかぞえれば36名であつ



たり、凱旋の帰国時には江戸旗本の弟子が一人一緒であったと聞く。養子なのか、楽士なのか、軍楽指導者なのか、不明である。

記録書による、戦場での死傷者（病死を含む）は下記の様である。」

論功行賞

○田中浅太郎、田中伍右衛門、新井兼吉、高室治兵衛

相続人に祭典料二両

一生の内、家族へ毎年米八俵

○藤野近江守、辻啓太郎、以下24名

一生の内、毎年米六俵

○高室重造、北小路万之輔、仲西市太郎（病死）

祭典料300疋 一生の内、毎年米5俵

○佐伯権之丞、樋爪弥五郎

一生の内、毎年米三俵

○水口備前守、辻参六（第2隊全て23名）

一生の内、毎年金三両

先頭第1の功を収めて、凱旋の途に上り、11月25日正午京都に入り御幸橋上に於いて全軍三たび歓声を揚げ、皇威の振張と王師の凱旋とを祝す。ついで公卿門より紫宸殿前に進み、二列に編隊せられて凱旋式を上げ、大総督宮より慰労の御沙汰を拝受し、酒賜り午後4時退出し、おのがじし其の當所に入りぬ。

我が山国隊が中立売御門内に勢揃して征来軍に加はりし2月13日より、今日茲にめでたく凱旋せる11月25日まで、月を費やす事10ヶ月、日の過ぎること約280日久しきに及び、関東奥羽の山野に勇奮苦闘してわずかに皇国臣子の本分を尽すを得たるは、ひそかに本郡民の光栄とし、また自ら誇負する所なり。その後は京都に駐屯して禁門の警護と洛中の巡回とにあたり、暇あらば椿寺の教練場に出て

て文武の道に励み、第1隊をして後顧の憂なからしめ、あまり其の軍資の調達は主としてこの隊の幹族にまかす所わずかにして、第2隊の功績は誠に没すべからざるものありといふべし。

戦場に於て

戦死者一田中浅太郎、新井兼吉、高室治兵衛（戦死）

田中伍右衛門（頭部射貫）

重傷者一細木元太郎、那波九郎左衛門（重傷）

高室誠太郎（腹部貫通銃創）

軽傷者一辻啓太郎、水口康太郎、森脇一郎
前田庄司、草木栄治郎

明治2年2月18日朝はやく京都新屋敷の舎営を發し、小野郷に至れば郷里よりの歡迎者頗る多くここに来ており、周山に到れば親戚縁者皆集り迎へ、途上祝盃をあげる事幾回なるを知らず、午後4時漸く郷に入り直に山国神社に参じて神徳を謝し、凱陣の式を行ふ。同25日、隊列を正して五社明神に詣で、更に辻村薬師山に登り7名の戦死者の招魂祭を行った。

明治11年10月18日先帝陛下京都皇宮に御駐輦の際、藤野斎外47名は皆王事に勤勞せし事を、特に列立拝謁の光栄に会し、皇宮内御常御殿御廊下に整列し、お顔を見る事が出来たことは、永く後生に伝ふべき至上の名誉なるべし。明治28年平安奠都に、1100年記念祝典の京都に上げらるるや、其の一盛儀たる時代行列中に我が山国隊を加ふること、なり。一同平安神宮に参拝し市中を巡行し当時の武功と姿勢とを新にしたりき。同32年11月に至り「山国社」と称する団結をなし、広く社員を府下の篤志家に募り、確固なる基礎を築き

て、永遠にこの芳烈を保存することとなれり。同36年6月16日かたじけなくも金15円を官祭招魂社祭祀料として、おそれおゝくも御下賜あらせられしぞ、重々の恵みとやいふべき。

稜威 天皇の威光。
輔弼 君主をたすけて政治をとる。
翼賛 力をそえてたすける。
贖 胸、征伐する、伐。
功臣 てがらのあつたけらい。
畫策 はかりごとをたてる。
梗概 物語などのあらすじ。
芳 かんばしい。
奏請 天子にお願いを申しあげる。
征夷大將軍 源頼朝以来、幕府のかしらとなつて天下の政治を行つた職。

勅命 天皇の命令。
勅許 天子のおゆるし。
議定 協議してきめる。
興 おもしろがる。さかんになる。
朝議 朝廷の会議。
事端 事件のいとぐち。
専横 わがままなふるまい。
帥 軍隊をひきいる頭。
鎮撫使 反乱や暴動などをとりしずめる役。
檄文 いそいで人々にまわして見せる手紙。
平定 わるものをたいらげてさわぎをしずめる。
陣 軍隊の配置。
駐蹕 天子がその場所に車をとめる。天子の滞在。
壯姿 勢いさかんな姿。
篤志 熱心にそれを援助する人。
芳烈 すぐれたてがら。
後顧 気がかりでうしろをふりかえる。

論功行賞 てがらのある者をしらべて賞をあたえる。
山国神社「例祭」10月15日である。





『山国隊軍楽の成り立ち』

山国隊は軍楽隊として東征に行ったのではなく、そして丹波山国農兵隊ではなく、美浜県京都山国隊として由緒ある人物を集めて東征に行ったのである。京都に明治元年11月25日に帰り明治2年2月18日故郷へ凱旋の帰国をするまで、椿寺で文武に励み、京の町を巡回したと記録にある様に、彼等はどうやら文武と言うより椿寺で軍楽を学んだ様である。山国隊保存会の方の話によると、帰郷時何故か幕府旗本の弟子が一人一緒であったと聞かされているそうです。その人は養子なのか、欠けた楽員の一人なのかと考えられますが、私は彼が軍楽の指導者であったのではないかと思います。又、後記に紹介しておりますが、京都の町から出て来た「權變録」(パレード・音楽指導書)を見てもわかる様に、彼等は約3ヶ月間の内に椿寺で勉強したと考えられる。もちろん、この様な音楽は長崎を初め、

東京(江戸)函館(北海道)や行政を中心とする都市で徳川幕府の末期には、軍事を洋式にならってオランダ式教練を導入するなど兵術全般を洋風化した。軍楽隊も移入され、フランス式鼓笛隊や英人フェントンの指導による「赤隊」など洋式楽隊が現われ盛んに演奏されていた様子である。その影響は、オランダ、ドイツ、フランス、イギリスなど様々な国から、そして日本風に変化して行った音楽と理解される。そして、現維新勤王隊は、小太鼓(4)フランス製、大太鼓(1)、笛(17)篠笛6号、指揮者(1)、その他旗持ち(交替要員である)から編成されている。そして、大変であり大切な事は、当時の音楽を今もなを時代祭の先頭を歩く維新勤王隊軍楽が今日に伝えている事である。



山国隊が文武に
励んだという

「椿 寺」

〔京都市上京区一条通西大路東入
南側 大將軍川端町〕

◀周山街道の出发点であった

正しくは地藏院といい、浄土宗知恩院派の寺である。地藏堂に安置する地藏菩薩は神亀三年(726年)行基菩薩が勅命によって彫り摂津国の昆陽寺に安置したのを移したといわれ、そのため本寺の山号を昆陽陽山と号する。はじめ衣笠山の麓にあったが、足利義満が金閣寺を建立するにあたり、その余材をもって本寺を再建し、天正十七年(1598年)豊臣秀吉の命によりこの地に移したと伝えられる。地藏堂背後の板扉は室町時代の作で、もと北野の多宝塔の遺構といわれる。書院の前庭にある有名な散り椿は、もと朝鮮蔚山城にあったのを、文禄の後に加藤清正がもちかえって秀吉に献上したもので、北野大茶場を催したとき、秀吉がしばらくここを別荘としたゆかりでこの寺に寄進したという。境内墓地には、忠臣蔵で有名な天野屋利兵衛の墓といわれるものや、与謝蕪村の師にあたる夜半亭巴人の墓などがある。



趣
意
書

設立当時の趣意書

趙意書

[illegible]

發起人一同

平安神宮は多くの神社の創立とその趣を異にし全く京都市民の総意に依て創立せられたものであります。殊に秋の時代祭は京都市としては重要な意義をもつものであります。京都は桓武天皇の延暦十三年奈良より遷都になり平安京と号けられたのが創始であつて爾来一千七十余年間の帝都でありました。明治二十七年は遷都より正に一千百年に相当するので此の時に当り京都では京鶴鉄道の敷設第四回内国勲業博覧会の開催遷都千百年記念祭の挙行を三問題として喧しく伝えられ就中記念祭典は記念殿の造営を伴う大事業でありますから当時内貴甚三郎氏は委員長となつて之に方り東奔西走その至誠と熱意は遂に多くの同情と支援を得、爰に遷都記念祭協賛会が成立致しました。斯くして京都及東京を中心とし全国の支援を得こゝに遷都当時の朝堂院を模擬した広壯華麗なる記念殿の竣成を見たのであります。人々延暦の昔を追想して皆之を大極殿と呼ぶ様になりました。

然るに京都市民の中より平安朝最初の元首たる桓武天皇の御聖徳を欽仰追慕し神社創立の議が澎湃として起り、此旨明治二十七年一月十三日上願同年二月十日聴許同年七月社格を官幣大社。号を平安神宮と称せられ爰に御創立を見たのであります。

却説第四回内国勲業博覧会は時の議會を通過し京都に於て開かれる事に決し岡崎町今の平安神宮前に敷地を卜し明治二十八年四月一日より七月三十一日迄開会されましたが之に呼応して一方京都としては同期間中京都御苑内の博覧会場に於て時代品の展覧会を催し延暦時代以下江戸明治時代に至る間の絵画圖書彫刻織物其他美術工芸品の名工巨匠になる作品が夥しく陳列せられ歴史上美術工芸上裨益する処多大であつたのみならず他の物産と共に外国貿易進出にも大きな力となつたのであります。此の時協賛会に於ては四月に官祭を執行されるを以て私祭を秋とし延暦以来近世迄の時代を仮装して行列を作り神幸祭とすべく衆議一決明治二十八年より行われる事になり翌二十九年よりは毎年遷都由縁の十月二十二日舉行される事になつたのであります。之即ち時代祭の始であります。京洛山河秋色將に聞ならんとする候都大路に繰り上げられる千有余年の大絵巻は居ながらにして當時の文物姿態を髣髴たらしむる而已ならず一面風俗史及び歴史上の活材料たるべく洵に吾が京都に相応しく而も深厚なる意義を持つものと云ふべきであります。斯くして年を経るに従ひ京都市の地域も漸次拡大され之に伴ひ時代祭列も増加し更に孝明天皇の御神靈を合祀されるに及んで新たに神殿の御造営が行われ益々輪煥の美を増し時代祭も亦歳を重ねるに従ひ改善を加えられ愈々其盛名は広く海外に迄知れ亘るに至つたのであります。

然るに今般神社制度の変革にともなつて従来の組織も幾多時勢に即せざるの点も生じ爰に吾々京都人は新たに平和建設の時にあたり当初の精神を時代に生かし新らしき民主的な組織を以て平安講社を組織し平安神宮奉賛団体としてこの意義深き時代祭をも復活致したいと念願致して居る次第で御座います。

希くは市民各位の御協賛を切に御願ひ申し上げます。

昭和二十三年十一月

昭和二十三年十一月

發起人一同

時代祭

桓武天皇は今から約1200年の昔、この山美わしく水清き山城の勝地をえらび国都を經營せられ、延暦13年10月22日、新京「平安京」に都を遷されたのであります。即ち「京都」の始めであります。京都市民はこの始祖神の御高德を深く慕い仰いで、遷都より1100年に当る明治28年、天皇の神霊をおまつりし平安神宮が創建せられたのであります。又、昭和15年には京都に最も御縁故の深い孝明天皇をも合せてまつられ、ここに全市の総鎮守として益々御神威を仰いでいる次第です。さて、明治28年平安神宮が鎮座されると共に全市民により崇敬団体の「平安講社」が組織され、その事業の一つとして10月22日平安遷都の記念日に御神幸の祭儀を執行することになりました。これが「時代祭」であります。この祭は平安京始めの延暦より明治に至る1100年間の文物風俗を手本とした衣装をつけて神幸列におともをする豪華な祭礼であります。当初は少なかった行列数も市域の拡大と共に次第に増加盛んとなり、延べ数千にも及ぶ華麗雄大なる行列となり、その装具もその道の權威者により研究整備され我が風俗史上殊に染織美術等の資料として重んぜられ、我が国著名の祭礼行事として広く知られる様になりました。然し、この行列も昭和19年からしばらく中絶されていましたが、戦後昭和25年再興せられ、これを機に更に婦人行列をも新たに

加えられて、本行列に一段の優美^{えんぴ}艷^{えん}麗さを添えるに至りました。又、昭和41年孝明天皇百年祭を記念して幕末志士列が加えられ、ここに時代祭行列の意義を一層深めることとなりました。



平安講社規約

第一章 総則

第一条 本講社ハ平安講社ト謂フ

第二条 本講社ハ平安神宮(以下単ニ神宮ト謂フ)ヲ敬仰シ尊祖ノ美風ヲ涵養シテ神宮ノ維持隆盛ヲ図ルヲ目的トスル

第三条 本講社ハ前条ノ目的ヲ達成スル為左ノ事業ヲ行フ

- 一、時代祭ノ執行
- 二、日供奉獻
- 三、講社大祭ノ執行
- 四、神宮ノ経営スル事業ノ協賛
- 五、其ノ他必要ナル事業

第四条 本講社ハ本部ヲ神宮社務所内ニ置ク

第二章 社員及区域

第五条 本講社ハ第二条ノ目的ニ協賛スル者ヲ社員トシ便宜市内ヲ十社ニ分ツ其ノ区域左ノ通り

第一社区域

成逸、乾隆、西陣、翔鸞、嘉樂、桃園、仁和、正親、聚樂、出水、待賢、待鳳、紫野、鳳德、柏野、紫竹、樂只、衣笠、大將軍、大宮、鷹峯

第二社区域

室町、紫明、元町、小川、京極、中立、滋野、梅屋、北白川、養正、養德、下鴨、葵、出雲路、上賀茂、修学院、松ヶ崎

第三社区域

春日、竹間、富有、教業、城巽、龍池、初音、柳池、銅駝

第四社区域

乾、本能、明倫、日彰、生祥、郁文、格致、成徳、豊園、開智

第五社区域

立誠、有濟、栗田、永松、弥栄、新道、六原、清水、貞教、修道、一橋、月輪、今熊野、山階、鏡山、音羽、勸修

第六社区域

淳風、醒泉、修徳、有隣、植柳、尚徳、稚松、菊浜、

第三章 役員

第六条 本講社ニ左ノ役員ヲ置ク

一、理事

各社ニ理事二名乃至四名ヲ置キ其ノ社組長ノ互選ニヨリ之ヲ囑託スル 理事中正副理事長各一名ヲ互選スル

一、正副組長

若千名

各社ニ組長一名 副組長若干名ヲ置ク

組長 副組長ハ世話係ノ互選ニヨリ囑託スル

一、世話係 若干名

区内各町ニ世話係一名ヲ囑託スル

一、事務員 若干名

神宮職員ニ委嘱スル

神宮職員ニ委嘱スル

顧問ハ平安神宮々司及理事会ニ於テ推薦囑託スル 参与ハ理事

会ニ於テ推薦セルモノヲ囑託スル

理事ノ任期ハ三ヶ年トスル、但再任ハ差支ナイ補欠員ノ任期ハ

前任者ノ残任期間トスル

組長、副組長世話係ノ任期ハ各社ノ便宜ニヨル

顧問ハ諮問ニ応ジ且講務ニ参与スル

平安講社規約原本

平安講社規約

第一章 総則

第一条 本講社ハ平安講社ト謂フ

第二条 本講社ハ平安神宮(以下単ニ神宮ト謂フ)ヲ敬仰シ尊祖ノ美風ヲ涵養シテ神宮ノ維持隆盛ヲ図ルヲ目的トスル

第三条 本講社ハ前条ノ目的ヲ達成スル為左ノ事業ヲ行フ

一、時代祭ノ執行

二、日供奉獻

三、講社大祭ノ執行

四、神宮ノ経営スル事業ノ協賛

五、其ノ他必要ナル事業

第四条 本講社ハ本部ヲ神宮社務所内ニ置ク

第二章 社員及区域

第五条 本講社ハ第二条ノ目的ニ協賛スル者ヲ社員トシ便宜市内ヲ十社ニ分ツ其ノ区域左ノ通り

第一社区域

成逸、乾隆、西陣、翔鸞、嘉樂、桃園、仁和、正親、聚樂、出水、待賢、待鳳、紫野、鳳德、柏野、紫竹、樂只、衣笠、大將軍、大宮、鷹峯

第二社区域

室町、紫明、元町、小川、京極、中立、滋野、梅屋、北白川、養正、養德、下鴨、葵、出雲路、上賀茂、修学院、松ヶ崎

第三社区域

春日、竹間、富有、教業、城巽、龍池、初音、柳池、銅駝

第四社区域

乾、本能、明倫、日彰、生祥、郁文、格致、成徳、豊園、開智

第五社区域

立誠、有濟、栗田、永松、弥栄、新道、六原、清水、貞教、修道、一橋、月輪、今熊野、山階、鏡山、音羽、勸修

第六社区域

淳風、醒泉、修徳、有隣、植柳、尚徳、稚松、菊浜、

第四章 会議

第十一条 各社ニ於テ適宜役員總會ヲ開催スル

第十二条 組長總會ヲ本部ニ於テ毎秋定時ニ開催スル 必要アルトキハ理事

会ノ決議ニヨリ臨時組長總會ヲ開クコトガ出来ル

第十三条 理事会ハ必要ニ応ジテ開ク

第十四条 組長總會ニ於テ議決スベキ事項

一、予算ノ決定及決算ノ承認

二、理事会ヨリ提出セル議案

第十五条 理事会ニ於テ議決スベキ事項

一、組長總會ニ提出スベキ予算決算及議案ノ審議

二、講務執行ニ関スル重要ナル事項

第五章 會計

第十六条 本講社會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

第十七条 本講社ノ經費ハ講社員ノ献出金其ノ他ノ收入ヲ以テ之ニ充テル

第十八条 講社員ハ毎年定額ノ講費ヲ献出スル

第十九条 經費ノ剰余及既ニ積立タル金額ヨリ生ズル果実ハ積立金トシテ

蓄積スル 積立金ハ理事会ノ決議ヲ經テ臨時費ニ充テルコトガ

出来ル

第六章 附則

第二十条 本規約ハ組長總會ノ決議ニ依リ變更スルコトガ出来ル

第二十一条 本規約ノ外必要ナル事項ハ理事会ニ於テ定メル

第二十二條 本規約ハ昭和二十三年十一月二十二日より施行ス

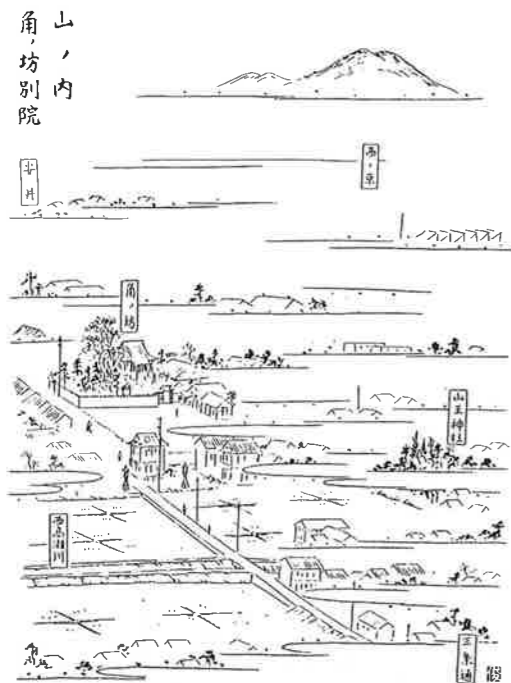
朱雀学区

現在は壬生、西ノ京一带を全て朱雀学区と呼び、朱雀第1小学校から第8小学校まであり、この地域を中心に平安講社第八社区域として時代祭に参加している。明治維新の変革は京都を舞台としてなされた。これは紛れもない事実である。二百有余年にわたって、徳川幕府が押しつけてきた非政治都市の理想がそのままに実在しているというのが京都の姿であった。やがて京都は政治の檜舞台となり、京都朝廷はいつのまにか強力な政治の発言権を得ていた。誰れもが京都にきて主張しなければ、その主張は空しく消えてゆくという世論の中枢がこの地に出来上がっていったのである。以下維新勤王隊軍樂を維持している、壬生・西ノ京の紹介をかね歴史を探って見た。

壬 生

壬生は四条大宮の西から西院に至るまでの地域をいい、壬生寺や新選組屯所のあったところとして世に知られている。壬生はもと葛野郡朱雀野村大字壬生とよばれた一閑村で、今の壬生寺周辺をいったものであるが、大正7年(1918年)4月、京都市編入されてからは中京区に属し、その地域も北は三条通りより南は松原通りまで、東は大宮通りより西は西大路通りまでの広範囲におよんでいる。

古来この地域は湿地帯で、水がつねに湧き出るところから壬生といわれるが、一説にはここが平安京左京壬生大路にあたるからともいわれ、諸説あって明らかではない。平安末期、左大史小槻隆職は太政官の事務をもっぱらつかさどる官務となり、その子孫はこの地に住んだので、地名によって壬生官務家と称した。歌人藤原家隆もこの地にあって歌集「壬生集」をあらわし、また三十六歌仙の一人にかぞえられた。歌人壬生忠岑、忠見父子もこの地に住んだ。忠岑が生前愛用したという硯



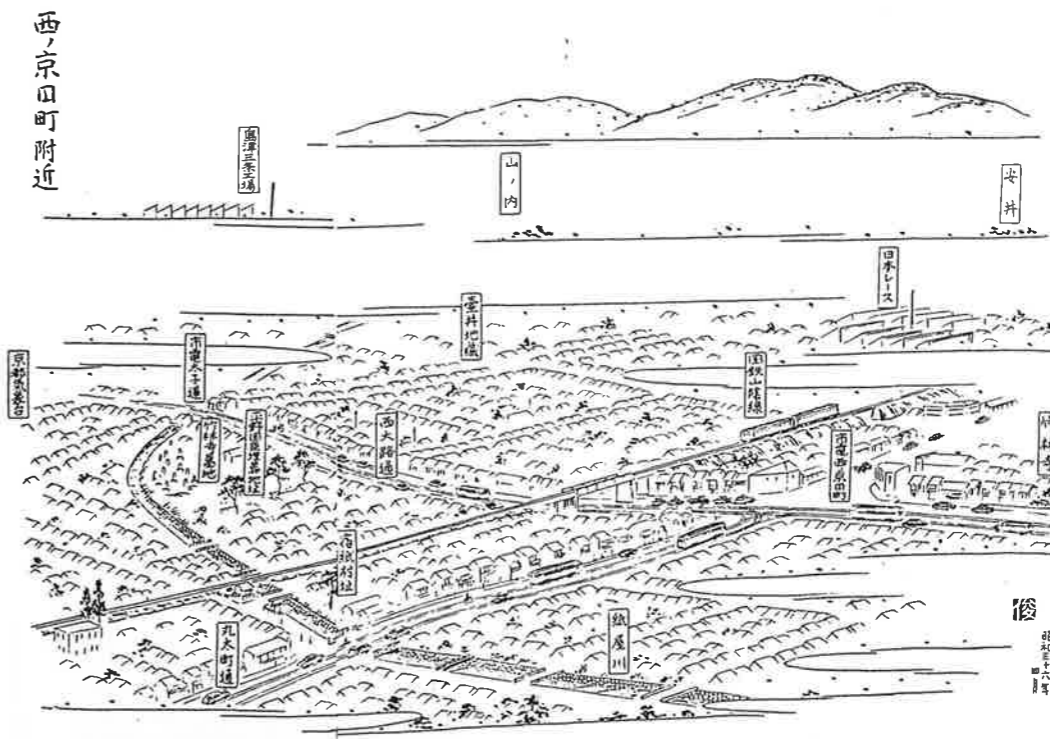
が江戸中期に発掘され、いまは壬生寺に秘蔵されている。しかし右京がはやく衰微してからは、この地も多くは田畑と化した。とくにこの地の水菜は世に壬生菜とよばれ、クワイ、セリ、ゴボウなどと共に壬生の名産とされた。

菜種の花さくのどかな往時の壬生村風景は、豊富な地下水に目をつけた染色業者によって、この地は染色工場街となり、林立する煙突からはき出す煤煙は壬生一带をおおい殺伐たる景観と化した。

西ノ京

現在は中京区で二条城の西側より西大路通りをへだって花園、安井に接し北は大將軍(北区)聚樂廻(上京)より南三条通りにおよぶ広大な地域を称していた。桓武天皇は長安の都域制にならって壮大な都市経営を行ったが、右京の地は地区整理のみがおこなわれたにすぎなかった。これは右京の地が湿地帯なために人が住むに適してなかったからであり、わ

ずか北方の一部にのみ人家がみられるにすぎなかった。西ノ京はこの右京の北部にあった一部の人家が村落化したもので葛野郡西ノ京村といった。今は千本通りから西をいい、北は一条通りより下立売通りの南にいたるあいだである。西ノ京村は明治初年に壬生村と聚樂廻と合併して朱雀村とよび、大正7年(1918年)4月に至って京都市に編入された。

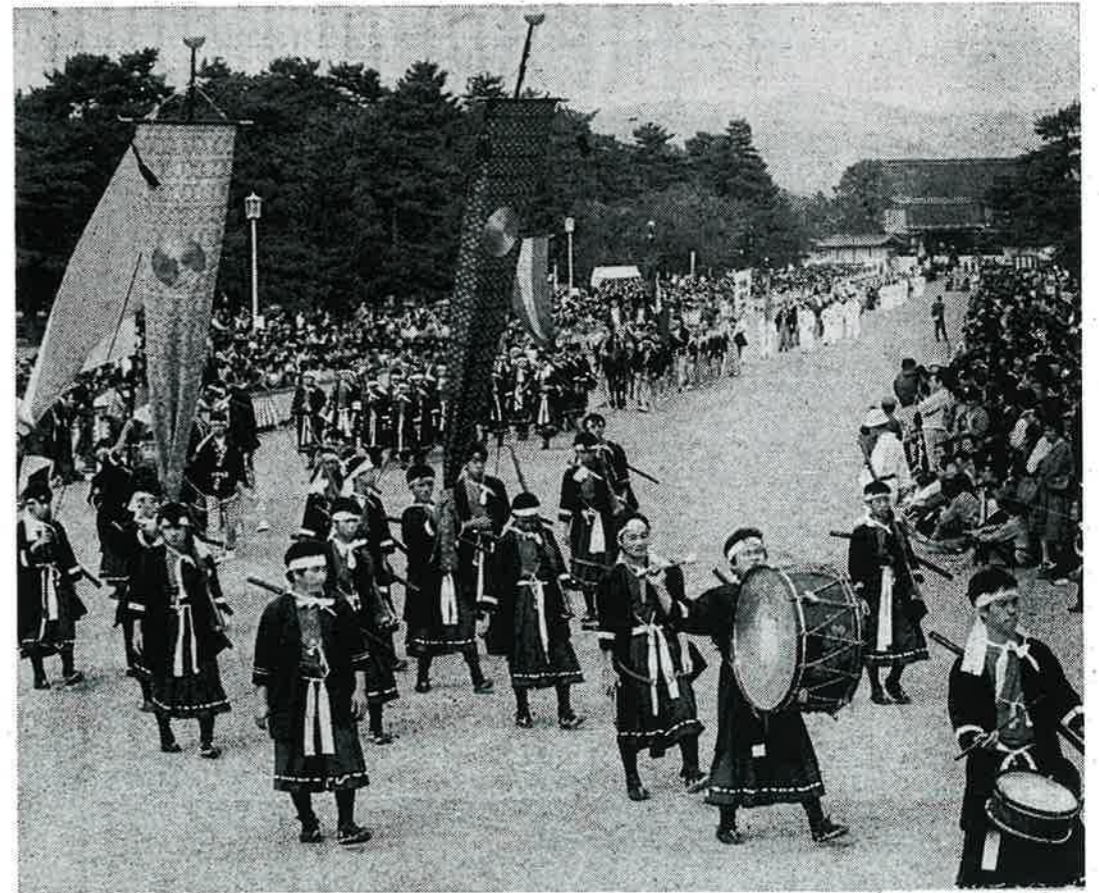
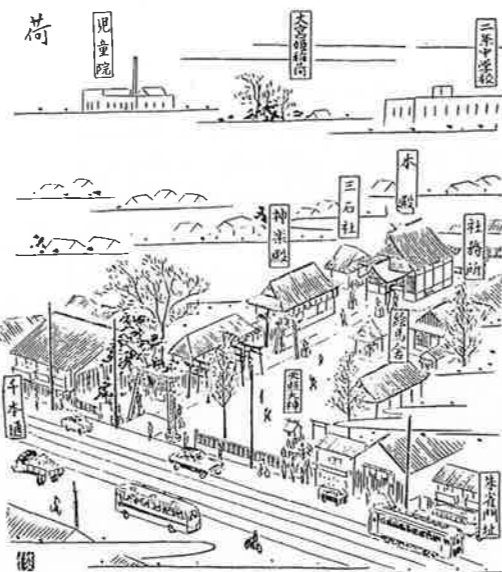


朱雀門址

あきらかではないが、出世稲荷より南へ約200m、中京区西ノ京小堀町(千本通二条上ル)附近という。朱雀門は平安朱雀大路(今の千本通)の北突当り、二条大路に面して立っていて大内裏南面中央の正門で、その名義は四神の南にあたる朱鳥、朱雀によったものである。桓武天皇が平安宮大内裏を造営される時に作られた宮城外郭十二門のうちの一つである。重閣門、大伴門、あまごい門とも言れ、弘法大師の筆による「朱雀門」の額が掲げられていたが、宮城正門としての価値も次第に薄れ狐狸の棲家となるほどの荒れようだった。盗人やルンペンもしばし門の楼上を棲家とし、やがて朱雀門には鬼が住むといわれ、「十訓抄」第十によれば「玄象」と称する琵琶の名器があって、内祖が焼けたとき、人の取り出さぬ前に飛び出して大庭のむくの木に掛けていたと言う稀代の霊物であるが、あるとき、この琵琶が盗まれた。そこで二七日の修法を行って祈願をしたところ、朱雀門に住む鬼が楼上の緒をつけてこれを返したという。また同書には三位源博雅が月夜に朱雀門の前で笛を吹いていると、同じく笛を吹く人があって、二人で合奏をした。それより明日の晩にはここで落ち合うことを約束し、あるとき三位が相手の笛を借りて吹いてみると世にも類なき名笛であったのでたちまち欲しくなり、笛を交換してもらった。しかし、三位はふとした事からなくなり、笛もそのまゝになっていた。この話を伝え聞いた時のみかど(円融天皇)がこの笛を所望され、早速笛吹きに命じて吹かせられたが、誰れも吹きこなす者がなかった。そこで笛吹きの名人といわれた浄蔵を召し出し吹かせたところ見事に吹いたので天皇は「この笛は朱雀門の辺で得たものと聞いているから、一度門の所で吹いてみてはどうか」と仰せられた。よって月の明るい夜に朱雀門

にた、ずんで笛を吹くと、楼門の上から大きな声で「かの三位より優れて上手だ」と誉め称えたので、初めて鬼が持っていた笛であることが分った。この笛には赤葉と青葉の二つを彫りつけていたので「葉二」と名づけ天下第一の名笛とされたという。また美女を得た話しなど朱雀門についてはまだまだ多くの伝説が伝えられている。

出世稲荷



華麗に千年彩る 時代祭

知事が初参加 市長と相乗り

京都の三大祭りを続ける「時代祭」が二十日行われ、都大路に古都千年の歴史を繰り広げた。今年から林田京都市知事も「名譽奉行」役で初めて行列に参加した。雪の空から沿道は七万二千人(午後一時現在、京都府警調べ)の観客で埋まった。

(9面に関連記事)

時代祭は平安朝から明治維新に至る風俗行列で、明治二十八年、平安建都千百年を記念して始まった。今年は九十一回目。途中、戦争などで中止されたため、祭りのものは八十二回目。

この日午前七時から平安神宮で神事があり、桓武、孝明天皇をまつた鳳輦(ほうれん)の神等行列が京都御所へ向かった。ハイライトの時代行列は正午、御所・建礼門前を出発した。

名譽奉行役の林田知事、今川京都市長が馬車に相乗りして行列の先頭を切った。ローヒヤ、ドン、ドンと鼓笛の音も勇ましい維新志士隊が進み、坂本龍馬や高杉晋作ら幕末の志士が続いた。花魁のきりぎりすもあつた。江戸や平安時代の女人列もあつた。行列は延暦年間(文、武官参朝列へと順に歴史をさかのぼっていく。平安神宮までの約四・五キロを学生アルバイトも含め総勢三千人、牛馬六十六頭の列が練り、沿道の目を奪った。

また、昨年に続き「ミズ日本」の六人の女性(三十二世紀のきもの)をイメージしたニエラファッションで特別参加し、九年後に迫った平安建都千二百年をRする横断幕を掲げて時代行列の前を行進した。

何故軍楽隊は

山国村から朱雀学区へ

(現 京北町)

大正時代末期より昭和時代初期の京都市政内部には色々な謎を感じる。何故ならば6ヶ月間、8ヶ月間たらずの市長、助役さんがいたり、就任2ヶ月も前より市長代理と名乗る助役さんがいたり。京都市は山国隊への補助金を大分けちっていたのではないか。明治から大正まで山国隊軍楽は時代祭の参加に山を越え、2泊3日を掛けて参加をしたと言う。大正9年にとうとう費用が続かず27年間の時代祭参加を断念している。当然山国隊と京都市の間には押し問答があったと思われる。そ

の後、表向きは穏便な形で丹波山国出身者の多い朱雀学区の人々が時代祭の軍楽隊を引き継いだわけだが、色々な経過に謎を感じる。西高瀬川(堀子川)を利用して昔から山国の材木を京都に運搬し宮中御用材木問屋が千本までの三条通り周辺に、今も昔しを思い出させる材木屋がある。その地、朱雀学区には昔から勤王の歴史があったそうで、大正10年より丹波出身者により維新勤王隊を結成し今日まで65年間時代祭に参加して来た。しかし、山国隊より受け継いだ頃は、全て山国隊軍楽

の真似をしていた様で大変悪い批判を受けている。次に上げる、昭和2年頃に差し出したと思われる奥村静女氏からの手紙で、その当時の事がよくわかる。したがって現維新勤王隊軍楽は奥村静女氏が作曲した作品で、昭和3年より演奏している事が明確である。維新勤王隊は時代祭に関し、平安公社(八社)とし、現長老は長谷川孝義氏である。軍楽隊指導者、顧問、参与、相談役を兼ね、現在72才の老齢者である。



▲現在の西高瀬川(堀子川)

奥村静女の手紙と訳

切手 □	市内大宮通四条上国民学校 壬生学区 時代祭り理事勤王隊 主任 御中	十月十一日	奥村 静
			京都市上京区相国寺 北門前上ノ町六七〇

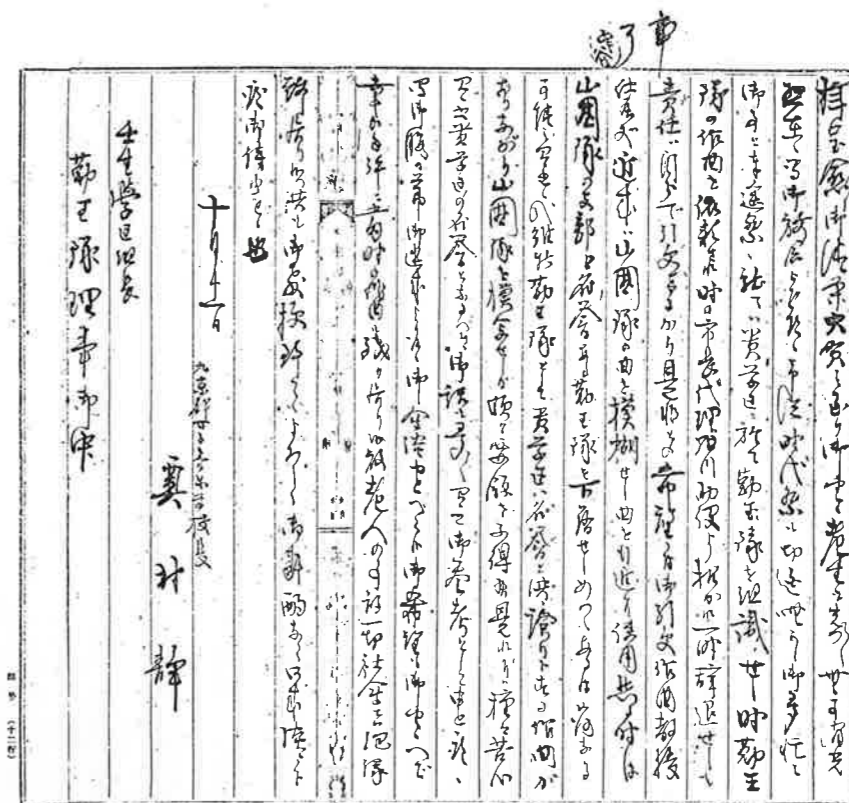
(表)

(裏)

▶ 封筒表・裏書



▼ 書状原文



勤王隊理事 御中

拝啓 益々ご清栄の事大慶に存じます。年を老いてまいりましたが先ずは、健康にして毎日を過しております。時代祭りも真近にせまり、さぞご多忙の事と存じます。ついては貴学区に勤王隊を組織され、市長代理より作曲を依頼され、一時は辞退したのですが、市長代理安川助役さんが全ての責任を取るからとの願いに一応お引受致しました。しかし、近頃山国隊の曲を真似て行進をしているが山国隊支部と名誉ある勤王隊をバカにしているのは何故か。維新勤王隊として朱雀学区には、ほこりと名誉ある曲がありながら、山国隊の真似をしている事についてなっとくがいかないと事を聞いている。色々苦心があると思いますが、貴朱雀学区にも名誉となるべき多くの話しも聞いております。ご迷惑かも知れませんが、お会いして貴殿方のご希望なども聞きたいと思ひます。幸い手許に昔の曲も残っております。今、私はもう老人で社会的な事は一つも致して居りません。作曲してもよいと思っておりますので、ご遠慮なくおいで下さい。お待ちしております。

10月11日

元京都女子音楽学校長（現華頂女子高等学校）

奥村 静

壬生学区組長 勤王隊理事御中

推察するに、当時大変揉めて山国隊は京都に来なくなった様子です。時代祭に参加する為山国隊は2泊3日も掛ったそうです。当時市当局も大変こまった様で、維新勤王隊も初めは山国隊の真似をしていた様子です。そして奥村先生も相当に年を取っているみたいです。おそらく75才前後ではないかと思ひます。そしてこの先生は江戸時代から明治にかけての音楽について色々な事を知っている人です。手紙を出した年月は昭和2年10月11日付である。したがって戊辰行進曲、朱雀行進曲等の曲は昭和3年の時代祭より演奏された模様である。

表書き

市内大宮通り四条上ル国民学校内壬生学区

時代祭り理事勤王隊主任 御中

本文

拝呈 愈々御清栄大賀之到り御重々老生に先づ／＼無事消光然在間御放念を下され度く希^{もと}從時代祭も切迫嘸かし御多忙之御事と東途繁々就ては貴学区に於て勤王隊を組織せし時、勤王隊の作曲を依頼され時の市長代理安川助役より招かれ一時辞退せしも責任は自分で引受けるから是非には御引受、作曲教授仕度処近歳は山国隊の曲を模糊せし曲を行進に使用然る時は山国隊の支部と名誉ある勤王隊を下落せしめてあるは如何なる事情あるは○維新勤王隊として貴学区な名誉と洪誉りとする作曲がありながら山国隊と模写せしか頂つて要領を得ず者は種々苦心あるは貴学区の名誉となるべき御話も多く有るは御尽考として申上候○御○の節御迷或より侯御会談申上べし侯御希望も御○へで幸い手許に当時の作曲も残り居り侯被老人の事酌一切社会には到し居り侯へ共も御教授致してもよろしく御斟酌なく御来談下れ度御待申上る也

十月十一日

元京都女子音楽学校長

奥村 静

壬生学区組長 勤王隊理事御中

裏書き

京都市上京区相国寺北門前上ノ町六七〇

奥村 静



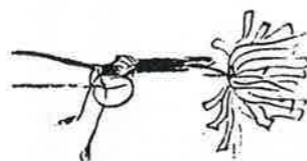
何故か当時の京都市長、助役は下記の通りである。

市 長				歴代市長・助役名簿	
順 位	氏 名	就職年月日	退職年月日		
第8代	安 田 耕 之 助	14. 2. 21	昭和 2. 8. 9		
第9代	市 村 光 恵	昭和 2. 8. 20	2. 11. 13		
○ 第10代	土 岐 嘉 平	2. 12. 13	6. 12. 12		
第11代	森 田 茂	6. 12. 21	7. 11. 30		

助 役				歴代市長・助役名簿	
氏 名	就職年月日	退職年月日			
向 井 倭 雄	8. 5. 5	9. 4. 12	11ヶ月間		
水 入 善 三 郎	9. 6. 22	10. 12. 2	6ヶ月間		
今 村 惟 善	10. 10. 29	13. 9. 20	2年11ヶ月間		
多 久 安 信	11. 5. 6	14. 3. 25	2年10ヶ月間		
千 葉 弥 助	14. 3. 23	昭和 2. 9. 7	1年6ヶ月間		
田 原 和 男	14. 5. 13	大正 14. 12. 26	7ヶ月間		
松 原 権 四 郎	2. 9. 3	昭和 2. 8. 9	1年7ヶ月間		
後 藤 祐 明	昭和 2. 12. 23	2. 12. 12	3ヶ月間		
○ 安 川 和 三 郎	2. 12. 23	6. 12. 12	4年 間		
岡 田 喜 久 治	2. 12. 23	4. 8. 12	1年8ヶ月間		
村 田 武	4. 8. 22	7. 12. 20	2年8ヶ月間		

○印 時代に関係した様である。

上記からもわかるように安川和三郎助役は十月十一日以前に市長代理といって奥村女史に作曲を依頼している。何故なのだろうか…？



横山孝之衛先生の太鼓奏法の教え

- 一、此の流儀の太鼓打法を学ぶ為には、最初の内は教師の教えを守り、順序を変えたり、自分勝手な打ち方をしてはならない。
- 一、最初の二つ打ちは、勿論の事、練習中や、もすればいやけを生じ自分勝手に打ったり、色々な工夫をした正しい打ち方をする者が少なく、二つ打ちを練習しなくて種々の打ち方の上達者は無い、と諸先生方はいましめている。だから段階を追って教える事決して間違いない。
- 一、練習時以外みだりに路上で打ってはいけない。
- 一、色々な打ち方のある中で、楽譜を勉強すれば、すぐに一人前に成ったと思う人が多いが、打法の軽い重い、リズムの遅い速いによって数万人の人々が動揺したり、勇気を失い、遂には一軍の兵の勝敗にも大きく拘る事があるので、心の中から自分を磨き、工夫専念し一つ一つ学ぶ事。

上の打点法は金沢達惣先生が弘化元年(1844年)に幕府の命令を受け長崎へ行き、オランダ人と称する、フィフテ氏に打楽器の奏法全てを学び伝えたものであり、興味ある。熱心な人達は、前記の諸先生方の教えを守り慎しんで正しい練習による奏法を身に付けるべきである。

嶋田壹三郎(藤原寿一)

此の流儀の太鼓奏法の練習については、制約を慎重に守り、少したりとも違反があってはならない。もし違反する者は、日本古来の神様より天罰が下るであろう。

弟子入り人数は次の通り

慶応元年 村屋良吉・上法寺霊雲・恩浄寺佐智恵・照田信兆・蓮生寺文嘉

二年 井上作左郎・細屋三吉・工藤□之助・細屋治作・和泉屋嘉作・株屋三吉・中屋佐吉・

小河内十治之助

村上辰雄先生は山口県光市出身の大楽二郎氏から入手したと言う。それからすると、藤原寿一は長州藩第二騎兵隊に所属した鼓隊の鼓手養成の師と思われる。当時長崎には幕府統治下の海軍伝習所があり、各藩からの優秀な武士が、航海術や海戦術を学びに幕府の命令で派遣されていた様子。そこでは当然軍事教練としての集団教育の中にパレードがあったはずで、金沢達惣先生は、その中で太鼓の全ての奏法を学んだわけである。当時先生は新しい事柄を学ぶについて神秘的に、うやうやしく厳粛に取らえた様である。

嶋田壹三郎(藤原寿一)

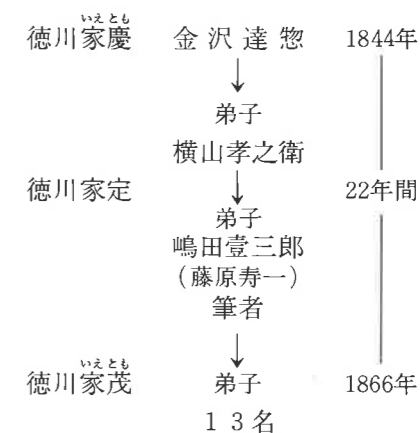
同一人物と考えられ、先の名はペンネーム、立人名、芸名ではないか。

横山 孝

当時は上記の様な名前はなく、孝之衛と云ったのではないか。

弘化丙辰

丙辰は甲辰(弘化元年1844)の間違えと考えられる。弘化には丙辰の年がない。もし丙辰となると安政三年(1856年)又は慶応二年(1866年)となるので内容が合わない。



一千里草銃ノ支ノ傳

ミヨウガヤリ
白水ヒタシ陰干し
作ルナリ真チアラ
用内水仙根ヲ以テスルナリ

一水筒之支ノ傳 戰場ニテ用意スル

一ダイカ、リノ支ノ傳 香ニナカク袋ニテ一但一尺二寸位
希當水筒其外色ニテ入ル具ナリ

水筒ハ年々筒カ又ハホニテ作りテモ好
水ノ四五合ニ入ル程スルナリ

(9)

惟時嘉永六癸八月酉之

種馬平廣平盛平盛門人
豊列直木郡岡藩

在 山 彦 玄 保 長 判

(奥 付)

一 番貝傳



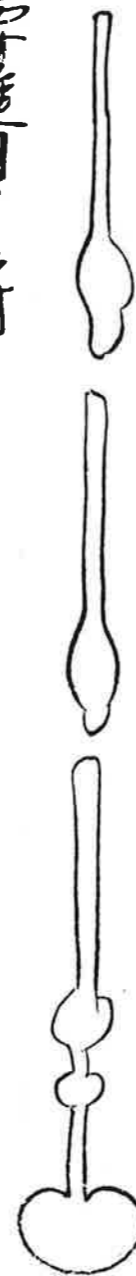
一 千番貝傳



一 千番貝傳



一 千番貝傳



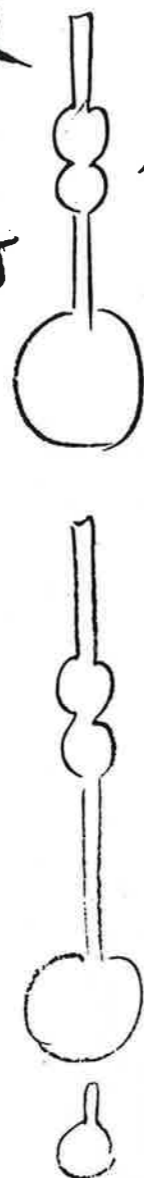
一 千番貝傳

(7)

要貝傳



要貝傳



引貝傳



一 要引貝傳



(8)

本報所樣之事

一ツリヤドヤドロボトニド

トニ
リ
コ

ツ
ヤ

ト
リ
コ

ト
ユ
ト

トコ
ドニ
ドコ

ドニトク
数限ナシ

リヤト云々
ニツドニドニ
トキ

ソクヤノ
武聲其ノ
時アリ
ト衛

シヤ
オレン

一
ド
ト云ハ大九田生
ド
ト云ハ小九田生
ニツナリ

一 柳塘大報傳

一進大教傳

一
張大鼓簿

一、夏木穀_ハ傳

一 常ニ
エニテエ
近路カケ替フニ二三ト云
ト云テ打合

五
三
下
上
上
五
八
一
二
々
々
上
蘭
云

貝次様之事

(5)

ツメヨシ湯ヲ以合スヘシ傳

一 采幣 持振ノ支口傳

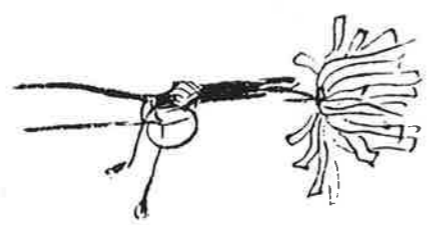
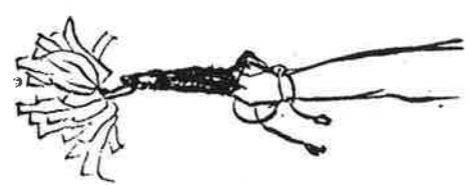
一 陣中ニテ持振ノ事居



一 緒掛様ノ支口傳



采幣振振



一 (足ヲハコブ) 言スノ振振傳

一 (ケスイ) デバノ振振傳

一 (ハル) ドノ振振傳

一 (エツ) バルヲイトテニ限ラズ隊ノ儀ケスイニテバノ
備ノ儀 一 持振

摩藥之法

- 一 饒粉 壹分
- 一 防風 三分
- 一 生薑 五分
- 一 白砂糖 五分
- 一 山藥 五分
- 一 井州 三分

此六品ヲ調合スヘシ

一 饒粉ト玄ハツキタル饒ヲ細クニキザミ其俵、日ニホシ後

(1)

又細クニ碎リナリ

一 防風 細碎ナリ

一 生薑 細碎リ其粉極上品ノ酒ニ之ヲ置ク一七日也
 正傳アリ

一 白砂糖 是モ上品前条ノ如シ

一 山藥 細碎ト玄ハツキタル生薑 細碎ト玄ハツキタル
 細碎キ酒ニ沉メ置ク其前条ノ同シ

一 井州 細碎リ計ナリ

是リ調合ニテ丸藥トスルニ井州ヲ二日ニ夜セシ

(2)

權變錄

乾

變要傳付録

表紙

ここより (38頁～28頁) 左へ読んで下さい。

「訳」 權 變 錄

その場に於ての記録

乾

けんこん
乾坤、天地、陽陰すなわち上下の意で乾は上巻を意味する。

變要傳付録

真新しい事を具体的に記したの意。

P1. 声樂の法

餅粉壹匁、防風三分、生姜五分、白砂糖五分、山薯蕷(長芋)五分、甘草三分、此の六品を調合すること。

餅粉はついた餅を細かにし、そのまゝ天日にほした後又細かに砕くこと。

P2. 防 風 (野菜の一種) 細かに砕くこと。

生姜細かに砕きその粉を上等な酒にしたし三日間程置いたもの。

白砂糖上質の物を選ぶ事。

山薯蕷はキョツキンとも言い山芋の事、長芋・筋芋とも言う。細かに砕いて酒に沈めて置く事前に同じ。

甘草(漢方薬の事か)細かに砕く事、此れを調合して丸薬にする為には甘草を三日三夜煎じつめ、その湯で調合すること。

P3. 采 幣 (采配・幣束のこと) の持ち方について。

戦場での持ち方。 (略)

その他の持ち方。

P4. 采配の振り方 (略)

足をはこぶ振り方 マロス(マルッシュ) Marsch 前へ進め

いそぎ足の振り方 ゲズインデパス(ゲスインデ・パス) Gesinde pas 連隊駆け足

とどまる振り方 ハルド(ハルト) Halt 止れ

備えのまゝ、隊列のまゝ、のいそぎ足の振り方 ホヲルバルライトテ (ホオルベライテン) Vorbereiten 隊列のまゝ、連隊駆け足。此のページの内容は正にドイツ語である。

P5. 太鼓の打ち方 (略)

ドンドコ、ドンドコ 数限りなし

ソリヤと言った時三つドン、ドン、ドンと聞いて止る事

ソリヤの掛け声を聞いて次の行動に移る事。

(略) 内容は前記の順にしたがって説明している様子である。

P6. ドンとは大丸星の事で、ドコは小丸星二つの事である。

押出太鼓、進太鼓、退太鼓、變太鼓。

常に駆け足、掛け声のもとに、エンテエ、エンテエ(一二、一二)と言って打つ事。

エン、テエ、エンテエとはオランダ語なり。

改めてオランダ語と書いてある事から前記はやはりドイツ語であろう。

P7. 法螺貝の吹き方

一番貝、二番貝、三番貝、進貝、要進貝

(略)

P8. 變貝、要變貝、引貝、要引貝

(略)

初め音長を意味しているのかと思っていましたが、どうやらパレードに関する
笛の合図である。

P9. 千里の道を歩く時の草履

ミヨウガを刈り、白水にひたし、陰干しをして作る。

真はあら麻を使い、鼻緒は水仙の根を使う。

水筒の事 戦場では水筒を用意しておくこと。

ヲイカカリの事 背に負う袋の事、但し一尺又は一尺二寸ぐらい。弁当、水筒
その他色々な物を入れる物である。水筒は竹の筒か又は木で作って
も良い。水が四、五合入る程度にする事。

惟時嘉永六丑癸八月寫之

種子嶋平左衛門平盛行慰堂門人

豊列直入郡岡藩

丸山亀松保長判

うしみのと
丑癸

嘉永六年の意味である。

松

松の事である。

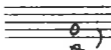
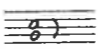
彼はいったい誰れに聞いたのであろうか、マーチングについては、どうやらドイツ式らしく、打
楽器の奏法はオランダ式である事が確定である。他は日本式であるが、ソリヤ、ドンドコド
コは実に楽しい。当時は真剣であったであろうが、法螺貝の合図、声楽の法は実に興味深く感じ
ます。

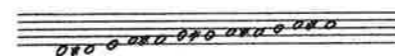
「戌宸行進曲」ぼしん行進曲

曲について

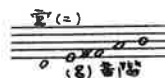

日本音楽の由来

日本音楽 (分類)	雅 楽	{ 宮 中 神 社
	俗 楽	{ 自然発生の民謡音楽 箏 三味線


「三分損益の法」これは中国の古い理論から  から $\frac{1}{3}$ 引いた $\frac{2}{3}$ の長さの音、すなわち三
分損した音である、又  に $\frac{1}{3}$ を加えた（完全五度高い音の八度下の音）であるから三分
益した音であるという。この様に順々に音列を得るのである。したがって起点音を（二）とすれ
ば所謂12律になる。



実際には旋律音としては、半音階ではなく、五音音階である。

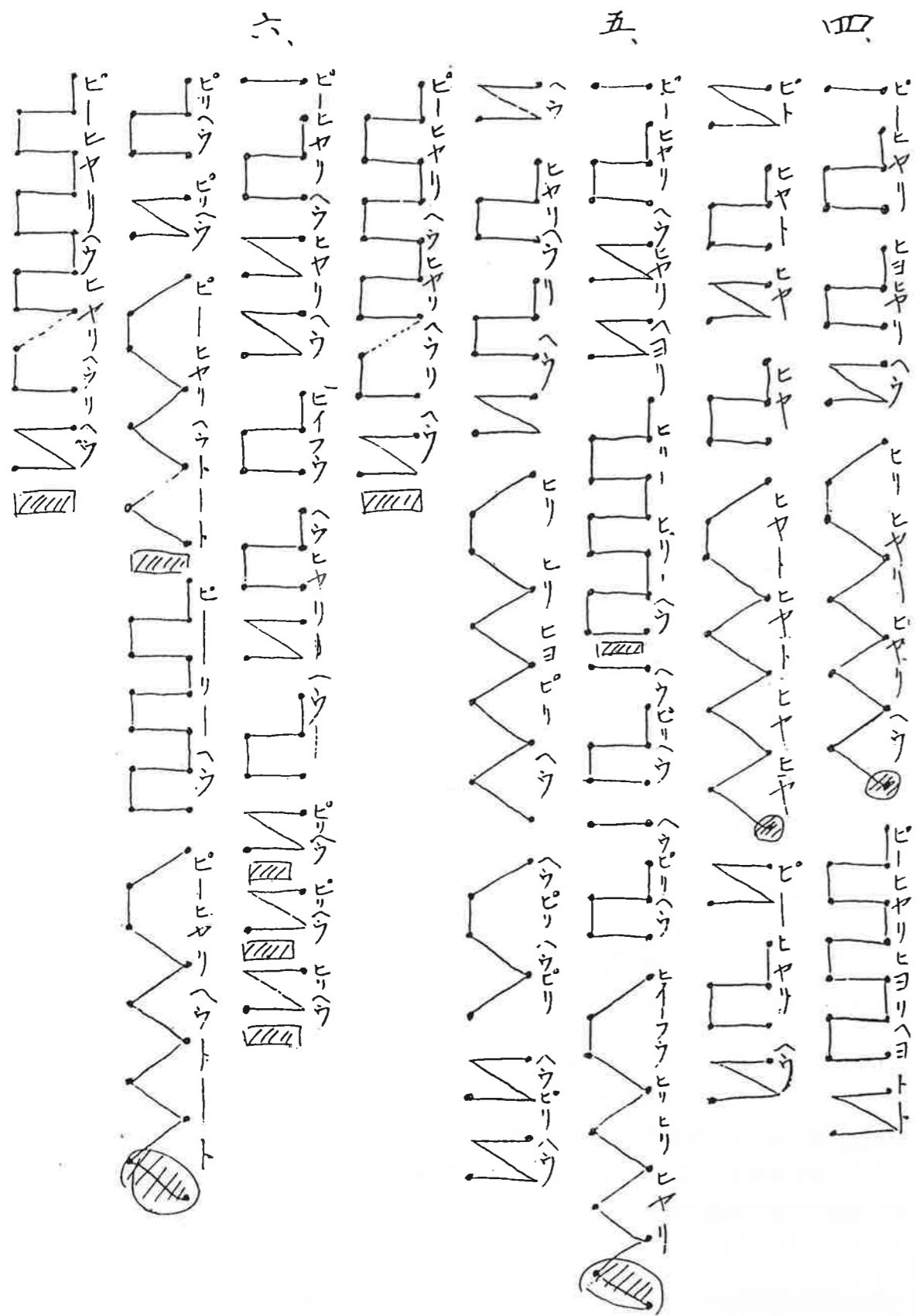
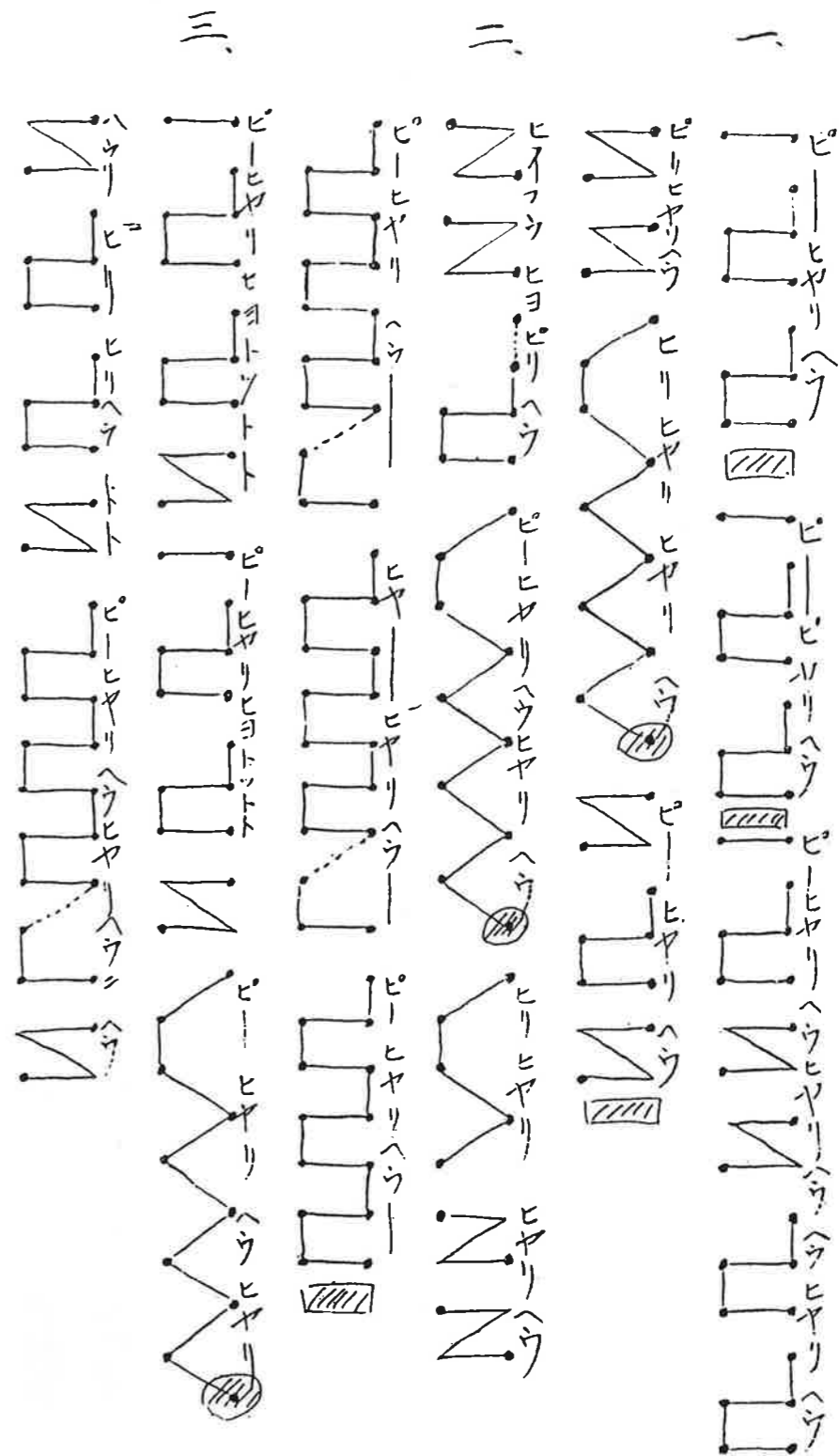
西暦紀元前2600年頃の伝説的人物黄帝の時代に決定されたといわれている。中国では昔から複雑
な象徴として、数多い神秘的な気持ちを備えているとされている「史記」によると、五つの音は五
つの方位、即ち宇宙の中心と東西南北との事で、又すべての森羅万象の形成する五行、即ち木火
土金水を持つ象徴といわれ、人体を五体といい、感覚を五官といい、五色といい、みなそれぞ
れの関係を持っていた様である。五音音階には宮・商・角・徵・羽の五つの階名が与えられている。
宮は主音であり徵は属音にあたる。日本では「順八逆六の法」という方法で実現されている。宮
を（二音）とすれば  が出来る。(八音)に移して見ると 

が出来る。すなわち呂の音階にはスコットランドの「螢の火」「夕空はれて」などがある。しかし

全く関係はないと考えてよい。律の規則的な構成は  からなる音楽であり、

山国隊の音楽はどうやらこのあたりから成る音楽と考えられる。そしてこの様に日本音階の研究
から此の音楽を考えると、もちろん中国からの影響を受け「順八逆六の法」にならっていると思
われ雅楽とする日本曲である。

山國隊樂隊行進樂譜



維新勤王隊樂譜

◎第一節

ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ

◎第二節

ヒ	ヒ	ヒ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ

◎第三節

ヒ	ヒ	ヒ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ

◎第四節

オ	ヒ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ

◎第五節

ヒ	ヒ	ヒ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ

◎第六節

オ	オ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ
ビ	ビ	ビ
ハ	ハ	ハ
リ	リ	リ
ヨ	ヨ	ヨ

維新勤王隊「戊辰行進曲」

(6)

録音テープより
写譜

(第五番目の天子の意)

2回目 第1節(8)

2回目

第2節(12)

此の音は絶対
にありえない

第3節(11)

第4節(12)

第5節(17)

第6節(17)

の音程が5度まる音程である。
線部分はおかしいと思われる箇所。D全音階はめいたに使わないはずである。
くり返しは細かい小節数がある。最初にもとまらばである。

この曲は、前奏—4小節、第1節—8小節、
第2節—12小節、第3節—11小節、第4節—
12小節、第5—17小節、第6節—17小節とな
っており、合計すると81小節になっている。
次の旧楽譜から演奏していると思われるが、
本来は4小節単位の偶数小節で割りきれなけ
ればいけないと思っています。すると第3節、
第5節、第6節に疑問があり途中で写し間違

えたのではないと思われる。この曲に前奏
があるのは当然おかしく、誰れかが演出上で
くり返し場所を定めたのではないか。演奏を
聞いていると音程の悪さ、段落部分の音長の
不正確さ、太鼓の不正確さが目立、真似る事
は大変むづかしい。しかし、この全体の響き
が、わび、さびを表わしているのかも知れな
い。



維新勤王隊楽譜

戊辰行進曲

前記の楽譜より作る

第1節(12)

第2節(12)

第3節(11)

第4節(12)

第5節(17)

第6節(17)

これらの楽譜は特に音程を重要視したものではなく、リズムを中心に書かれている様である。あえて突き詰めて考えれば、ピーシ、ヒーラ、リソ、ヒヨ・オ・ヒート→ミ、レとも考えられる。|は二分音符を意味しておりヒャリ ♪ オッ、トッ、アッ、ピッ、ヒャッ ♪ や下記のように考えられる。この当時の音楽にはスタッカート、アクセント、テヌート、スラー、タイ、f、P等の音楽表現記号は無かったはずなので、感じは言葉によって表現された様である。

ピー ヒー ヒョ ト ヒア | ♪ ヒー ヒャ | --- ♪ ♪

。 | --- --- --- 二分休止符又は段落の意 ヒャリ | --- ♪ ♪

ヒョ ヒョ オ ヒ ヒ ヒョヒョ | --- ♪ ♪ ♪

ピ リ ト ヤ リ | --- ♪ ♪ ヒョヒョ | --- ♪ ♪ ♪

オ | --- ♪ ♪ オ | --- ♪ ♪

ッ | --- ♪ ♪ ト | --- ♪ ♪

X | --- --- X | --- 四分休止符

神前奏樂小太鼓樂譜（朱雀行進曲）

(一) シー
ラ
シ
ラ
ソ
ー
ラ
ン
グ
ー
ネ
ソ
ン
レ
ー
ン
ン
ン
ン

(二) ミン ミン フランシーゼン ミン トン トン

(三) シレ^{庵音。} | シレ[。] | ミソ | ミソ[。] | テソ | ミソ | シー[。] | ラ |
 ラ | ラ | ラ | ラ |

小太鼓

(四) ソーラン ミーソミ トーミソミ トンミソミ トンミソミ トンミソミ トンミソミ

山國隊樂隊礼式樂譜

一、

ヒ
ー
イ
リ
(ヨ
ロ)
ヒ
ー
イ
リ
(シ)

ヒ
ー
イ
フ
ー
ウ
ヒ
リ
ヒ
リ
へ
シ

ヒヨビヒヨロヒヨロ
ヒヨロヒヨロヒヨロ
ヒヨロヒヨロヒヨロ
ヒヨロヒヨロヒヨロ

ニ

チ
イ
ル
ウ
リ
ー
ル
ル
ル

ナ
ー
イ
リ
イ
ー
イル
ル
ウ
リ

三

ヒヤリヒヨリ
へヨロ
へヨロ
チイイリイル
チイリ





(四)

(三)

(二)

(一)

神前奏楽、
笛楽譜（朱雀行進曲）

朱雀行進曲

前記の楽譜より作る

前の2小節は後に作られたものと考えられる。



北桑田郡著名人物

高本文平、西谷専次郎、安井惟彰、
田原正績、藤野斎、辻啓太郎、河原林義雄、
僧雲室、稲波誠、倉内猪左衛門、無相文雄、
中野業国

上記の中には、旗本武田兵庫の代官になった人、明治2年私財を投じて5年生の私学校（及時校の前身）を建て神吉村に寄附した人、明治8年京都府の監察役になった人、兵式体操を考え全国の学校教科課程に加えられた人、女学校に於ては自炊調理、礼儀作法実習を取り入れたり、明治10年フランスでの大博覧会に京都の特産品を出品させ世界に紹介したり、12年には京都名産会社を創設し対外貿易を行った人、13年には京都商工会議所を創設し琵琶湖疏水大計画、京都水力発電所、市電の開通、宇治川水力発電所の設立に協力、指導をした人、海軍少将になった人、「啓迷論」又は「絶頂講義」の序を作った人、医者の子として生れながら後を継がずに教育者になった人、12年に府会議員になり、府会議長になった人、17年には府下の茶業組合取締役になった人、27年には衆議員に選ばれ、又京都府教育長になった人など数多くの功績を残した人々ですが、ここでは、もちろん藤野斎を中心に紹介したい。

藤野斎

山国村の名族にして天保2年(1831年)に生れ、天資鋭敏書を好み常照寺の端巖和尚に学問を受けた。21才の春京都の学者、北脇淡水の門に入り漢学を学び、23才の冬より医学を高階典医に学ぶ。慶応3年(1867年)従五位下に叙せられ、近江守を拝任し、山国神社に奉任す。明治元年(1868年)山陰道鎮撫使西園寺公望義兵を募る時、山国隊を組織し官軍鳥取藩兵に

属し東征し、東国奥羽の各地に転戦して偉業を立てる。凱旋の後鳥取藩より終身年3石の報奨あり、明治2年2月久美浜県京都出張所庶務係を命ぜられ、4年6月戸籍係に転職、5年8月大郷長になり桑田郡第19区区長の職につく、8年9月地租改正係総代となり9年1月郡内第18区区長を兼務しさらに10年5月第5区区長兼学務取締となる。6月に京都府より賞状を受け12年3月北桑田郡の創設に際し、初代郡長となる。23年9月山国招魂社受持神官となる。33年多年勤王の勲勞と公共に対する功績とにより、長男卓爾(現戸主)は士族に列せらる。34年立机の式をあげ順風庵栖霞と号す。越えて36年5月11日歿す。享年73才。

藤野斎と牧野やな

明治6年征韓論に敗れた西郷隆盛は江戸から鹿児島に帰る途中、物議が起ってとはと、街道筋は緊張した。京都ではその警備に当たったのが藤野斎隊長であった。山国から周山街道を経て、車折神社まで隊を進めてきた一行は境内で休憩をとった。流れる汗をぬぐう藤野に「お疲れでっしゃろ」と横から茶を出す女性がいた。振りむいた藤野はその美しさに思わず一目ぼれしてしまった。「牧野やな」(当時義太夫芸妓竹本弥奈吉後に師匠となる)であった。すでに結婚している藤野ではあったが、一杯の茶がとり持つ縁となって、やがて二人は結ばれ、千本通一条で同棲生活がはじまった。やがて二人の間には長男徳三郎、長



「牧野省三」像

立命館禁衛隊

創設者である中川氏は同朋の人見氏、北川氏と共に財産を投じ立命館を作ったのである。彼等は共に山国村の出身で、御所との深い関係にあり、立命館の学生は広小路の御門を警固する禁衛隊とした様である。(禁は宮中を意味する) もちろん世界二次大戦中は学徒兵と



立命館中学禁衛隊山国隊 昭和16年

女増江、次男省三が生れる。藤野は次男が生れるとまもなく山国に帰らねばならなくなった。「日本映画の父」と言われた次男牧野省三は、したがって父の顔を全く知らないのである。彼の活躍は省略しますが、24才にして千本座(千本通一条上ル大長(超)寺の境内)の座主にもなり、明治34年(1901年)祇園新橋加藤楼の芸妓「雪」がアメリカ・モルガン財閥節のジョージ・モルガンに破格の4万円で落籍された、身請け事件について、彼は千本座にて「モルガン雪」の芝居を行ったところ、大変な評判を得たそうである。そして、省三は熱心な金光教の信者であり、彼は21才で、ため(知世)17才と結婚している。妻は千本通三条下ル宮中御用材木問屋(石橋屋)多田虎之助又は利兵衛の娘(平安女学院卒業)である。彼も父と同じ様に1目ぼれしたのである。今は静かに等持院に眠る。莊嚴院浄空映画飛雄居士(法名)1878~1929、享年51才。

して学生達は出兵したわけだが、聞くところによれば、昭和17年頃にはクラブ活動の一つとして、立命館には山国軍楽隊があった様で、山国村からも指導者が来ていたそうです。(立命館出身京都府中学校吹奏楽連盟顧問村上辰雄氏談)

著書、資料提供者、協力者の紹介

京都府北桑田郡誌

京都名所図鑑

權變録 乾

鼓法横山孝之衛先生之事 書より

村上辰雄 京都府吹奏楽連盟顧問

長谷川孝義 維新勤王隊参与、相談役、指導助言者

藤野洋 花園高等学校教諭

三島幸一良 三島建設(株)社長

編集後記

編集をして見て、山国隊音楽そのものは、実に単純なものである事を感じました。しかし、その関連と偉業は大変な事で、まとめる為には大変な苦心をしました。時代の変遷で間違っているのか、途中で誰れかが手を加えたのか疑問は残るばかりでした。そして事前に承認を得ずして、勝手に資料を使わせていただいたり、又いろいろな方のご協力があったり、ここで改めておわびとお礼を申し上げます。ありがとうございます。なお、日本音楽特に江戸時代を中心に研究なさっている方、私の家に昔し山国隊が集結した記録がある等編集後に知った方々がいます。広く資料を集めればもっと詳しい内容になったのではないかと思います。調べている内にまだまだ深い謎が沢山出て来ます。どうか次の世代の方で興味を抱き、もっと詳しく編集される方が現れた時、この資料が役に立てば大変幸いに思っております。



正 誤 表

	(誤)	(正)
2P 下	花園高等学村	花園高等学校
3P 中間	初めから私は	初め私は
16P 中下	京都市編入	京都市に編入
18P 中下	明日の晩には	明月の晩には
21P 左上	表書き	国民学校内
22P 中下	貴学区な名誉	貴学区に名誉
23P 中間	華頂女子高等学校	不明
47P 左文中次の旧楽譜		前の旧楽譜
49P 上	これらの楽譜	これらの楽譜 (45P)
" 中右	ピッ、ヒヤッ	ピッ、ヒヤッ アッ

